PROJECT

開発実践における人々の感情・フィールドワーカーの感情・国家と住民感情

文 関根久雄

共同研究 ● 実践と感情──開発人類学の新展開（2011-2013）

本共同研究は、「個人的リアリティを構成する個人の内面に生まれる感情を取りあげ、感情に注目した新しい開発支援の方法（開発人類学の姿）について考えること」を目的に、2011 年 10 月にスタートした。本稿脱稿時（2013 年 12 月）までに 9 回研究会を実施し、感情社会学における「行為化、社会化された」感情理解に関する議論を参照しつつ、「開発実践における人々の感情」「開発におけるフィールドワーカーの感情」「国家の開発と住民感情」の 3 つのテーマに関わる考察をおこなってきた。以下は、前回の文書（『民博通信』No. 140）以降におこなわれた報告の概要である。

開発実践における人々の感情

白川千尋（当時国立民族学博物館、現大阪大学）は「感情と信頼関係──青年海外協力隊員の事例より」において、現地のカウンターパートなどと日常的な協働関係にある協力隊員が常に彼らとの間で「怒り」の感情を交わしていることを指摘する。支援の現場を一種の情動のコミュニティとして捉え、そこで「生身を晒し合う」中で採られる表現の 1 つが「怒り」であり、それを通じてはじめて信頼関係を構築することができるという。しかしそこでは、コミュニケーションを可能とする範疇に怒りをおさめることや、前提として相手への強い関心があること、双方の怒りの感情が共通の目的に向いているなど、表面化している感情のズレを調整する社会文化的規範を支援の現場において探り出す必要がある。

上田直子（当時横浜国立大学、現 JICA）の「援助とソーシャル・キャピタル──中米シャーガス病対策からの考察」は、JICA によるホンジュラスでの寄生虫感染症シャーガス病対策プロジェクトの事例について、社会関係資本の観点から援助効果の持続性を検討した。上田は感情を、根源的な身体的感覚を表す感情（emotion）ではなく、より理性的で社会関係においてもたらされる感情傾向（sentiment）の語を用いて表現する。事例ではプロジェクトの対象村落の人々が抱く喜びや達成感、名誉などに関わる感情が住民ボランティアの内発的動機を喚起し、それが住民と行政の関係性の持続を担保する社会関係資本をもたらしたという。上田は、開発援助の成果の持続性から見て、これまで援助の文脈において取りあげられることの少なかった対象地域の人々の sentiment に注目する意義を説く。現地の人々の感情だけでなく、援助を供与する側の感情にも注目し、双方の感情がもつれ合う空間に開発と援助の目指すべき地平があることを指摘した。

チュニジアのオアシス農民の家族（2011 年 9 月、鷹木恵子撮影）。

カトマンズ近郊の農村で換金作物の普及活動をおこなう青年海外協力隊員（2012 年 8 月 24 日、白川千尋撮影）。

開発におけるフィールドワーカーと感情

開発の文脈における感情に注目する際、フィールドワーカー自身の感情は当該開発プロジェクトなどの動向に大きく関わることであり、本共同研究における主要な対象でもある。

藤掛洋子（横浜国立大学）の「連帯から分裂へ──パラグアイ農村部における国際協力活動より（1993-2013）」では、1993 年から現在に至る彼女自身のパラグアイにおける国際協力活動を振り返り、研究と実践の間を往還する過程で彼女自身が立ち上げた NGO 活動を巡る現地の人々の快・不快双方の感情と、彼女自身の感情の交錯についての報告があった。人類学的研究が実践分野にとってどのような役割を果たすことができるのか、その応用可能性に逡巡する姿は、実践、研究双方に関わる感情規範の組み直しを迫るものといえる。

縄田浩志（総合地球環境学研究所）は「村入りで『感情的になる』──現地調査の流儀をめぐって」において、スーダンにおける開発援助プロジェクトへの参加を通じて、外部社会からやってきた各関係者（各集団）が内面化する現地調査の「流儀（作法）」の違いという課題が存在することを指摘する。そのことは、「実験科学者が導入したい新技術」「野外調査者が集めたい在来実践」「開発援助事業担当者が推進したい普及内容」の間における感情的な対立へと発展していった。しかし、実際にはプロジェクトの目的は関係者間で共有されていたのであり、感情的な交流がうまく行きさえすれば方向性として妥当な活動に各自の流儀を収斂させていくことができたはずである。異なる流儀のもとにある各関係者が共有する感情規範を誰がどのように構築するかが課題として残る。

井上真（東京大学）の「居心地の悪さへの対処：学術研究と国際協力の狭間で」は、インドネシア・カリマンタンの焼畑民村落における調査および国際協力活動を通じて彼自身が抱いてきた、「誰のための調査か、国際協力か」という倫理的問題を起点とする葛藤に関わる報告である。彼は参加型開発論における外部者の脱権威化に共鳴し、アクションリサーチ的に現地の人々と接する中で、「人々のためであり、自分のためでもある調査」と明言できる状態に行き着いた。しかしその後、JICA 長期専門家としてカリマンタンに滞在していた時、JICA が用意した都市の一軒家での「快適な」暮らしを、それ以前に彼が 1 年以上滞在していた村の村長に「見られたこと」に対する後ろめたさ（自己嫌悪感）が彼を襲った。都市で暮らす自分と村にいるもう一人の自分。井上は 2 つの自分の間の移ろいを「変身」と呼ぶ。フィールドワーカーが変身する存在であるという現実を直視し、後ろめたさを飼い慣らしながらフィールドワークや国際協力活動に関わることの重要性を指摘する。

感情を介したフィールドワーク論を展開する亀井伸孝（愛知県立大学）は、「フィールドワークと高揚感：『盛り上がり』をいかに演出・制御・活用するか」において、カメルーンとコートジボワールにおける調査を通じて経験した現地の人々の「盛り上がり」を例示した。感情は人々の行動や情報の流れを左右するものであり、ある場における感情を理解しそれに対処することで、事態を特定の方向へ向かわせることも可能である。例えば会話の中で合いの手を入れることでその場にいる人々の感情が高ぶり、それが行動に結び付くことは容易に想像できる。亀井は人々の感情＝資源と捉え、それを分配したり回収したりすることによってフィールドワークを構成し実践活動を展開する可能性に言及した。

ろう者たちとの手話の撮影前の打ち合わせ。コートジボワールにて（2013 年、亀井伸孝撮影）。

佐藤峰（JICA）の「開発援助業界のフィールドワーク：ODA 女性人材の『やる気』を左右するもの」では、日本の開発援助業界で非正規に雇用される女性人材に注目し、彼女たちの「やる気」の持続性について検討した。ここでいう「やる気」とは、物事を積極的に進めようとする気持ちのことである。一般に人々は、達成感、人間関係、報酬などの程度を通じて職場におけるやる気を左右させる傾向にあるが、開発援助業界の文脈に限定的な要因や女性に特有な事情もそこに付随するはずである。ただ単にその業界に対するあこがれや使命感のようなものだけでは説明できない ODA 女性人材の感情規範を読み解く作業は、開発実務のフィールドを動かす動力の一端を明らかにするという意味において興味深い。

国家の開発と住民感情

鷹木恵子（桜美林大学）の「チュニジアのオアシス開発政策と革命後の農民暴動──農民の感情と論理についての一考察──」は、1980 年代後半から 1990 年代半ばにかけてチュニジアで構造調整の一環として進められた国営農地の民営化過程でオアシス地帯の貧農たちが抱いた感情とその背後にある彼らの論理に注目し、2011 年のチュニジア革命後に発生した農民暴動の原因について検討した。オアシス農場の民営化を巡ってはマクロ、ナショナル、メゾ、ミクロの各レベルに、重なり合う部分はあるものの微妙に異なる論理が併存している。国際協力・開発援助はそれらのいずれかを主要ターゲットにしておこなわれるが、それらを繋げる試みをしつつ農民たちの抱く感情規範を読み解いたり、彼らが紡ぎたいと願っている意味の網の目を明らかにしたり、それを農民たちと共に紡ぐための実践人類学の方向性について考察した。

真崎克彦（甲南大学）は「ブータンの民主主義研究の実践と感情」において、国民総幸福（GNH）指向の民主主義の追求を国是とするブータンが、実際には開発を通じて資本主義的民主主義の確立を目指す方向に傾きつつあることを指摘する。市場化というグローバルな流れと切り離せない人々の心情がある一方で、真崎は、ブータン人の基本的な「感情」には国民主権と国王主権が共存しており、それは同時にブータン人の理性でもあると説く。「ブータンらしい民主主義」と資本主義的民主主義、そして君主制の混淆を希求する人々の感情と国家開発の思惑との不整合は、常に近代化過程における課題である。

感情規範の不整合

感情経験は、驚きや意外性を起点にそこから「怒り」や「喜び」などの感情を覚え、それをその社会やフィールドワーカーの「世界」がもつ集合的な感情規範に照らして認知的評価をおこない、その結果が行為や言語を通じて表現される。上記の報告に共通する点は、開発の場を共有する社会（国家含む）や集団がもつ感情規範の不整合が否定的な感情表現として社会的に表出される、あるいはその潜在性をもつということである。また、社会や集団において同じ感情規範を共有していても、その規範の実際の運用（感情表出）の仕方は一人ひとり異なることも考えられる。いわば集合的感情規範は行為化、言語化にあたって個別バージョンを内包するということである。亀井が述べるように感情を資源として捉え直すことができるとすれば、感情規範を巡る不整合を個別バージョンに配慮しつつ修正することによって、感情は開発の実践領域において有効に機能しうる。

せきね ひさお

筑波大学人文社会系教授。専門は文化人類学・オセアニア島嶼研究・開発研究。著書に『開発援助と人類学──冷戦・蜜月・パートナーシップ』（共著 明石書店 2011 年）、『共在の論理と倫理──家族・民・まなざしの人類学』（共著 はる書房 2012 年）、論文に「対話するフィールド、協働するフィールド：開発援助と人類学の『実践』スタイル」『文化人類学』72（3）（2007 年）など。